美しくなつかしい、日本をのせて。

Cradle

［クレードル］出羽庄内地域文化情報誌

1

2021 January/February

TAKE FREE

NO.63

特集

地芝居、黒森歌舞伎の1年

庄内憧憬

稲田美織

写真家

Cradle 1

美しくなつかしい、日本をのせて。

［クレードル］出羽庄内地域文化情報誌

2021 January/February

令和3年1月1日発行（偶月奇数月発行）第11巻3号（通巻63号）

発行／Cradle事務局　山形県鶴岡市山王町8-15［株式会社 出羽庄内地域デザイン］電話0235(64)0888

制作／Cradle編集部　山形県酒田市宮田2-59-3［コマツ・コーポレーション］電話0234(41)0012

FIDEA GROUP

鶴岡市／鶴岡公園

謹賀新年

皆さまのご健康とご多幸を心からお祈りいたします

本年もどうぞよろしくお願い申し上げます

荘内銀行

一枚の写真に導かれて

稲田 美織

冬が生命に力強さとエネルギーを授けていた。
だからこそ庄内の春は、
一層その美しいきらめきを放つのであろう。

庄内を訪れたのは、今から11年前の9月。映画『蟬しぐれ』に出演され庄内にご縁ができた俳優の原田美枝子さんに導かれ、私は生まれて初めて鶴岡駅に降り立った。そして山伏の先達により、月山8合目から湯殿山に悪天候の中を縦走したのだった。一度も景色を望むことはできず、雨と白い霧の中をただひたすら黙々と登っていった。結局、道中で写真を撮影する機会はなく、湯殿山に到着した時にようやく雨がやんだ。その時、目の前に広がる光景に息を飲んだ。たなびく雲の上に山々が島のように姿を現し、まるで水墨画のようだったのだ。私はそれを無我夢中で撮影した。その時の一枚の写真によって、私は出羽三山神社に導かれ撮影をする機会をいただいた。その写真は2019年、『日月巡礼 出羽三山』という写真集の表紙となった。

庄内に何度も足を運ぶうちに、出羽三山の神秘だけでなく、庄内に存在する美に次々と出逢い魅了されていった。特に私が感動したのは、鮮明な四季の美しさだった。東京にいると季節の移ろいに鈍感になるが、庄内で過ごしているうちに体内の感覚がどんどん研ぎ澄まされてゆくようだった。また不思議なことに、いつしか月山や鳥海山が見守ってくれているような感覚が生まれた。

庄内の冬の美しさは格別だ。ある日、雪原で月山を撮影していると、真珠貝色の雲の隙間から一筋の光が山肌を照らし、雪に覆われた月山は特別な存在感を放っていて、その神々しさは圧倒的であった。まるで地平線から姿を現した大きな満月のように。

また春の訪れは、山裾から上に広がってゆくのかと思っていたが、雪解けの頃、月山に登って見た春の始まりは、私の想像をはるかに超えていた。なんと高度は関係なく、雪が解けたところから春が訪れていたのだ。高山植物は雪の消えた部分で可憐な花を開花させ、水芭蕉はまるで輪になり踊るバレリーナのようだった。

私はずっと春が季節の始まりと思っていたが、冬からさまざまな準備が始まっていたことに気が付いた。冬に降った山の雪が水を蓄えるダムになり、春から夏に、山のミネラルをたくさん含んだ水によってあらゆる生命は生かされる。雪の下や硬い木の幹の中では、すでに桜や多くの花の蕾の準備が始まっている。冬が生命に力強さとエネルギーを授けていたのだ。だからこそ庄内の春は、一層その美しいきらめきを放つのであろう。

雪解けの頃、月山で咲くイワカガミ
写真＝稲田美織

いなた・みおり／多摩美術大学油絵科を卒業し、教職を経て、1991年からNYに移住。95年ハーバード大学で個展デビュー。アメリカ同時多発テロを自宅で目撃して以来、世界中の聖地の撮影をライフワークとする。05年に伊勢神宮、09年に出羽三山神社の撮影を開始。国連、コロンビア大学、イスラエル美術館、致道博物館、スイデンテラス、外国人記者クラブなど世界中で展覧会と記者会見を開き、ワシントンポストなどさまざまな媒体に掲載される。出版多数。12年日中国交正常化40周年で展覧会が外務省正式行事に。16年伊勢志摩サミットで写真書籍がG7首脳陣に公式配布。15年神道文化功労賞。

特集

地芝居、黒森歌舞伎の1年

赤い鳥居に雪がかかり、杉木から時折木漏れ日がさす2月半ば。
「寒中芝居」「雪中芝居」と呼ばれる地芝居の正月公演が行われます。
酒田市の黒森地区に江戸時代から伝わる「黒森歌舞伎」は、
旧暦の小正月に、鎮守日枝神社の祭礼として奉納上演されてきました。
降る雪も冷たい風も演出となって、役者勢の渡り台詞にますます場は熱を帯び、
日が暮れるまで、最後の場面を名残惜しむように誰もみな芝居に興じます。
280年を超えて続いてきた歴史は、この時世によって上演の中止を余儀なくされながらも
希望の柝の音とともに、また新しい1年が幕を開けます。

写真提供＝松本鶴子（黒森歌舞伎妻堂連中 座員）
30余年にわたって黒森歌舞伎をカメラで追い続ける。
二科展写真部山形支部員。第12回酒田市土門拳文化賞奨励賞（2005年度）、第60回齋藤茂吉文化賞（平成26年度）など受賞歴多数。
著書に写真集「黒森歌舞伎の記録」ほか。酒田市日吉町「麻檀夢 華苔」オーナー。
プロフィール写真他撮影＝Cradle

地芝居、黒森歌舞伎の1年

黒森歌舞伎の歴史

江戸で花開いた庶民文化「歌舞伎」が、旅役者らによって地方の城下町から農山漁村にまで伝えられた享保年間。

酒田の黒森村にも旅籠があり、村人は役者との交流の中でその芝居や物語の楽しみを知っていきました。享保年間を創始とする「黒森歌舞伎」は280余年もの歴史の中で日本の「地芝居」の文化をつないできました。

写真提供＝黒森歌舞伎妻堂連中

昭和38年に常設舞台として演舞場が完成、写真はその翌年に上演した「時今也桔梗旗揚」。
役者の中には、黒森歌舞伎の演出に多大な影響を与えた振者（演出家）、佐藤藤太郎氏の姿もある。

享保20年、霊夢に導かれた黒森村の與吉家、幼名與作が、斎戒沐浴して彫った「面」、それは歌舞伎の開演に先立って演じられる式三番の「翁」と「三番叟」の面でした。それが黒森歌舞伎の始まりに由来すると伝えられています。創始の由来は諸説ありますが、280年もの歴史が続いてきたことは、黒森の人たちが歌舞伎に情熱を傾けてきたからに違いありません。「ここまで続いてきた最大の理由は、鎮守・日枝神社の祭礼と座の行事が結びついてきたからでしょうね。黒森歌舞伎にはその昔ながらの地芝居の伝統が受け継がれています」。そう話すのは妻堂連中座長の五十嵐良弥さん。役者、裏方、運営からなる妻堂連中（座員）は黒森地区の人たちで構成し、それぞれ仕事と両立しながら行事や公演に向けての稽古や準備をこなし、地芝居の歴史をつないでいます。

全国に数ある地芝居の中でも、黒森歌舞伎は古典的な歌舞伎の特徴を残しているといわれます。それは「女形を男性が演じている」「太夫と語りがそろっている」「舞台が幕一枚の背景ではなく毎回組まれる」ということ。「役者は主役を張っていた人がやがて裏方に回り、次の主役を育てます。この世代交代を10～20年サイクルで行い、技術面を維持してきました。逆に言えば主役が育つまでにそれくらいかかるということ。このサイクルが今後は難しくなるでしょうね」。少子化が進み後継者が減っていく中で、25年前「少年歌舞伎」を立ち上げ、黒森小学校の子どもたちを対象に次代の担い手を育て始めました。「最近は黒森以外から座に入りたいという子も出てきました。地の者だけで演じる地芝居ですが、続けていくための知恵を出し合って、未来につなげる活動をしていきたいと思います」。

一方、長い歴史の上でうれしい転機もありました。東京大学大学院の研究生で長く黒森歌舞伎を研究していたポーランドのイガ・ルトコフスカさんとの10年来の約束を叶え、令和元年に初の海外公演を実現。ポーランドでの全4公演はすべて満員御礼、大盛況のうちに幕を閉じました。「スタンディングオベーションが起こって、我々の芝居が海外の人たちに伝わったという実感を得ました。通訳をしてくれた現地の学生とは今も交流が続いていて、海外の人たちと文化でつながることができたことは何よりの成果でしたね」。

海外公演を経験したことで、全座員が舞台をつくることへの意識を強めたと五十嵐座長。ある意味〝新生〟ともいえる黒森歌舞伎、令和3年の正月公演は全員が開催の意向でしたが、時世には逆らえず無念の中止が決まりました。「庶民が見て楽しいのが歌舞伎。心から楽しめる日が来たら、座員が一心となっていい舞台をお見せしたいと思います」。

令和元年11月3日～8日のポーランド公演は、日本との国交樹立100周年記念イベントの一環で開催。会期中に歌舞伎の上演だけでなくワークショップも行い、海外初公演は大盛況となった。

黒森歌舞伎妻堂連中 座長
五十嵐 良弥さん

昭和33年生まれ。7歳で初舞台を踏み、役者として活躍。42歳でお囃子の後継となり裏方に回る。令和元年、座長に就任。前座長で盟友の故冨樫久一さんの想いを抱いて、ポーランド公演を実現、大成功を収めた。

享保20年に作られた翁、三番叟の御面。神霊を宿すとされ、黒森地区から外に持ち出されることはない。

妻堂連中の「妻堂」とは道祖神すなわちサイノカミ（塞の神）、サイド（塞道）を意味し、奉納芝居としての歴史が読み解ける。「妻堂帳」は嘉永3（1850）年から演目や会計報告などを代々の座長が記録し、受け継いでいる。

黒森歌舞伎で上演される演目は50数番。「菅原伝授手習鑑」「義経千本桜」「仮名手本忠臣蔵」ほか「高田馬場十八番切」などの黒森独自の演目も多く残っている。

衣装部部長・会計
佐藤 秀さん

昭和30年生まれ。代々翁面と三番叟の御面を受け継ぐ家系に育つ。30余年前に座員となり衣装部長に抜擢、その後会計を担当。

黒森小学校の男子生徒による少年歌舞伎。歌舞伎の名場面を見事に演じます。

地芝居、黒森歌舞伎の1年

奉納芝居の四季

かつて「農民歌舞伎」といわれていたように
黒森歌舞伎の1年は、四季の農作業と結びついていました。
娯楽のない時代、農民らが芝居小屋を建て、舞台をつくり、
ひしめく観衆に芝居を届け、また日常へと戻っていく。
以来、古典の地芝居はその土地の人々と共に進化を続けながら、
おおらかな農村の原風景を残し、その時代の景色を映し出しています。

黒森歌舞伎は令和2年、「第3回未来かがやくやまがた景観賞」県知事賞を受賞しました。地域をあげて保存と伝承に努め、ポーランド公演による国際交流への貢献を期待されての栄誉、そのプレゼンターを務めた酒田市教育委員会の川島崇史さんにお話を伺いました。

「地芝居は全国に170あるといわれています。黒森歌舞伎はその中でも地域の祭礼と結びついて定着していることに文化的価値があります」。江戸時代、歌舞伎はその語源の「傾奇者」なる異端の象徴から、厳しい上演の制約を受けました。しかしその制約に反し、旅役者によって舞台の面白さにひかれた地方の庶民らは、自らの土地で芝居を楽しむようになります。やがて「神社への奉納」という形をとって制約をくぐり抜け、地芝居は広がりを見せていきました。

「近年は地芝居も地域おこしのような観光的な面も持つようになりましたが、奉納行事の形として残る黒森歌舞伎は実に古典的です。しかも昔から運営にかかる費用は行政の補助金などに頼らず、自分たちで集めた寄付で賄っています。だからこそいい舞台をつくり守っていこうという気持ちが強いのだと思いますね」。

20年前の調査研究を機に、長くその歴史を見つめてきた川島さんは、景観賞でのプレゼンの最後をこう締めくくっています。「幼少期から地域の伝統文化にふれ、自ら参画することで、地域への愛着や誇り、人と地域とのつながりを築く力が養われる。感動を与えることで、伝統文化を継承していく心と生きがいをも生み出す。黒森歌舞伎は、地域の未来を担う、人を育てる活動でもある。先人たちが大切に守ってきた地域文化の灯を絶やすことはできない」。

—お話を聞いた方—
酒田市教育委員会
川島 崇史さん

社会教育文化課文化財主査兼係長。平成11～14年度に実施した黒森歌舞伎の調査研究に参加して以来、公私にわたってその伝承保存に携わる。ポーランド公演では事務局として一行を支えた。ご長男がその姿に影響を受け黒森歌舞伎への参加を熱望、地区外から初の「研究生」として迎えられている。

昭和54年に黒森地区の故星川竹雄氏が描いた年中行事絵巻「黒森芝居の絵暦」。

年間行事

3月10日前後の日曜日

太夫振舞

翌年の演目を決める祭礼。地区の若者が籤者となり精進潔斎して、神事の後、社殿裏の井戸水を桶で7杯半の水垢離（みずごり）をとり身を清める。続く「ご神籤（しんせん）の儀」では、予め総会で選んだ3つの狂言を書いたこよりを、白米を入れた1升枡の上に置き、神意によって釣り上げた1本が翌年の演目となる。

4月29日

春例大祭

4月29日は日枝神社の例大祭。神事の後の渡御行列では、子どもたちが翌年の演目の衣装を着て、正月公演の予告披露としての山車が練り歩く。その後、当年の神宿の主人らが歌舞伎の仮装行列で翌年の神宿に向かい、神宿渡しを行う。

8月

虫干し

黒森歌舞伎では衣装約500点、かつら約50点を行李に入れて蔵で保管している。8月の好天の日、衣装部を中心に蔵から衣装を出して神社の境内一面に張ったロープに広げて干し、点検を兼ねる。干し終えた衣装をたたみ、翌年の公演で使う衣装と使わず保管する衣装とを仕分ける。

8月16日

お面開き

享保20年、集落の「與作」という若者が斎戒沐浴をして翁面と三番叟の面を彫り、奉納したことから歌舞伎が始まったとされる。御面には神霊が宿るとされ、子孫の家の神棚に祀り、この日と正月公演の時のみ箱から出される。妻堂連中の代表が子孫の家から神社へと御面を運んで神前に安置し、神楽と式三番叟が行われる。

10～11月

役割

振者の原案のもと配役を決定する。

本読み

役者が演舞場に集まり台本の読み合わせ。年明けの立ち稽古まで何度か行われる。

1月

地固め

全座員が集まって今後の日程確認や衣装出し、大道具の点検などを行い、正月公演に向けて本格的な稽古や準備に入る。

2月

二日奴

昔行っていた寄付願いの「勧進」。現在も妻堂連中が黒森地区の家々や庄内地域の企業などに協賛金のお願いに回っている。

2月3日

節分

演舞場の玄関や舞台など四方を酒で清めて豆をまく。その後生豆を12粒焼いて、その焼け具合で今年の天気を占う。

2月第一日曜日

おさらい

通し稽古を行い、地区の人々に披露する。

2月11日

花道づくり

昭和38年に演舞場ができるまでは「掛け小屋」といって地域の人々が仮設の芝居小屋を建てていた。その名残で現在も地区の自治会が持ち回りで、妻堂連中と一緒に花道を組み立てている。

2月14日

寄せ太鼓

公演前日、境内に黒森地区の子どもたちが集まって、明日の歌舞伎の予告と大入りを祈願して太鼓を打ち鳴らす。

あご別れ

公演前日の最終確認と成功祈願。

2月15日、17日

正月公演

10時から神社拝殿で神事が行われる。舞台では、黒森小学校の生徒による黒森少年太鼓、続いて神楽、式三番叟、黒森少年歌舞伎、本狂言が上演され、夕刻に終演する。

2月18日

勘定、おしろい落とし

公演の経費を精算し、黒森地区の家々に公演の報告をしながら神状札とお神酒を届ける。その後、直会で座員らは労をねぎらい酒を酌み交わす。

地芸居、黒森歌舞伎の1年

妻堂連中の芸と技

妻堂連中が一座をなす黒森歌舞伎。現在は45名ほどが在籍し、振者、役者、浄瑠璃、お囃子、衣装、床山、大道具、小道具、運営方、相談役の10の部会に分かれながら、それぞれの思いと情熱で黒森歌舞伎を演じ、支えています。そんな座員の皆さんに会いに行きました。

吹雪が舞う1月下旬の夜、演舞場に仕事を終えた役者たちが集まり、正月公演の練習を行います。「自分たちは元役者のじいさんたちと歌舞伎の話をしてきた世代で、夜中まで酒飲みながらいろいろ教わったなや。『褒められんなも笑われんなも役者。下手な演技はできねぞ、自信持ってやれ』ってハッパかげらっだけの」そう話すのは看板役者の佐藤敬さん。祖父が座長を務めていたことから高校卒業後に熱心な誘いを受け、平成3年頃に断りきれずに参加。次第に演じることの面白さに目覚め、十数年前からは主役を多く演じています。

主役と張り合う敵役を主に演じている菅井克之さんは、役者をまとめる大頭も担当しています。座に入ったのは平成5年頃。高校を卒業して地元を離れた際に「地元に戻って地域貢献できる何かをしたい」と考え、帰郷後すぐに自ら黒森歌舞伎の役者を志願しました。「正月公演に向けた稽古を初めて見に行った時、当時の役者たちのセリフを聞いてゾクっとして、演技に釘づけになっての。この人たちの一員になれるんだったら、自分は生涯歌舞伎を続けていきたいって思たなやの」。

座の飲み会に参加したのを機に練習に誘われ、気がつけば舞台に立っていたというのは、女形を主に演じる五十嵐司さんです。「初舞台後の打ち上げがとにかく面白くて今に至るわけですが、セリフがついて、他の役者との掛け合いが増えてくると演じることが楽しいと思うようになりました」。

座に入り、続ける理由はさまざまでも「普通に生きてれば拍手をもらうことなんかめったにない。するとだんだん欲が出て、もっともっとうまくなろうと役者は思うわけでの」と話す敬さんは以前は練習が嫌いで、一人自宅でプロの所作を模倣して本番に向かっていたそう。次第に大きな役がつき練習に行かざるを得ない状況になると、周りと自分の調子が合わないことに気がつきます。それ以来、練習に足を運ぶようになると徐々に周りとの呼吸が合うようになり、物語の意味を深く捉えられるようになったと言います。「大切なのはセリフや呼吸の『間』。それが合えば演じることがぜん面白くなるし、客席にも伝わる。結局は我々が一番面白がっていないとダメでの。280年続いてきた中で自分たちはほんの少しの関わりだけど、この時代が一番面白かったって言われたくて続けでんなやの」。役者は全員がライバルで、舞台は個々の技の競い合いだったという時代から、呼吸を合わせ、役者全員でつくる舞台へ。黒森歌舞伎の役者表現は、新たなステージに入っているのかもしれません。

写真提供＝黒森歌舞伎妻堂連中

役者

七五調の小気味いいセリフにのせて、力強く見得を切る。いつの時代も客席を魅了してきた黒森の役者たち。俳優部には現在20名ほどの役者がいます。

佐藤 敬さん
役者名／笹本 敬
昭和46年生まれ。立役として荒事や二枚目などをこなす。過去には女形の経験も。ポーランド公演を経て「座が一枚岩になった」と話す。

菅井 克之さん
役者名／岩井 克之
昭和43年生まれ。敵役の代表役者。思い出深い演目は「忠臣蔵」（平成16年）。演じてみたい役はまだまだたくさんあるそう。

五十嵐 司さん
役者名／市川 司
昭和58年生まれ。現在は女形が多いが、ポーランド公演の演目「義経千本桜」の狐忠信を演じるのが目標。

地芝居、黒森歌舞伎の1年

浄瑠璃

浄瑠璃とは物語のナレーター的存在で、三味線を伴奏に太夫が語る芸能のこと。ここにお囃子が加わって表現豊かな舞台芸術をつくり出します。

歴代、1人で三味線と太夫をするのが伝統だった黒森歌舞伎の浄瑠璃。24歳で座に入って以来、役者一筋だった星川貴史さんは先代の太夫の逝去に伴い「続けていくためには誰かがやらないといけない」と太夫の道へ。役者経験を生かした語りを担当し、平成24年からは三味線の佐藤潤一さんと2人体制の浄瑠璃になりました。「黒森の浄瑠璃には正式な譜面がないので、過去の映像を見て一つ一つ音を拾ってつないでいます。とにかく聴くしかなくて」と貴史さん。相方の佐藤潤一さんも20年来、三味線一筋。「ゼロから積み上げて完成させる達成感があります。行事が生活のサイクルに組み込まれていて、打ち上げの時になると一つのものを完成させたやりがいが残る。だから続けてこられたと思います」。

浄瑠璃は、舞台の流れを時に導き、時に抑える重要な役割を担っています。「役者に熱が入ってくると我々も引き込まれて、時々演技に見入ってしまうこともあります」と潤一さん。貴史さんも「演技に感動して語りながら泣くこともありますよ。その時はきっと、いい舞台ができているんだろうなと思いますね」。舞台の上で役者を盛り上げていきたい、と話すお二人。表舞台も裏方も一人一人の「芸」を結集した歌舞伎は、日本の総合芸術の粋を見せてくれます。

星川 貴史さん
役者名／松本 貴史
昭和43年生まれ。俳優部で立役などを経て7年ほど前から太夫を担当。地元の若手や高校3年生への新規勧誘、少年歌舞伎の指導にも携わる。

佐藤 潤一さん
昭和47年生まれ。お囃子部の部長で三味線を担当。黒森歌舞伎の幕開けを飾る黒森小学校の生徒たちの「少年太鼓」の指導も受け持つ。

舞台

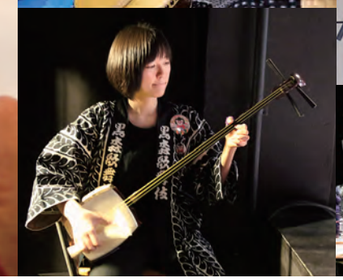
村人総出で一から組み立てていた芝居小屋は昭和39年に今の演舞場へ。これほどの舞台装置がそろう地芝居は他にないといわれています。

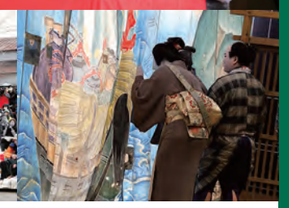
「役者が気持ちよく演じられるようにという思いで舞台を組んでいます」と話すのは、結婚を機に平成18年に埼玉から黒森に移り住んだ星川辰也さん。それまで歌舞伎にふれたことのなかった辰也さんは、毎年の演目が決まるたび過去の映像から学んで舞台をつくり、現在は五十嵐座長いわく「なくてはならない存在」として大道具部の部長を任されています。

黒森の舞台は幕一枚で展開する他の地芝居と違い、演舞場の天井に何本もの「バトン」が設置され、場面に合わせた幕や舞台道具が吊るされます。「浅葱幕」と呼ばれる薄幕も独自のもの。倉庫には襖だけで何十種類も保管し、演目に合わせて選び、足りないものは大道具部や小道具部が一から作ります。「ここまで本格的になったのは、昭和20〜30年代に黒森に一時住んでいた舞台づくりのプロ、渡部幸次郎さんのおかげです。その教えが今につながって全体の質を高めているのだと思います」。そう話す副座長の佐藤芳弥さんは、持ち前の器用さを生かし、役者時代から小道具作りを手伝っていました。「床山部は役者に合わせてカツラの髪を結い直し、衣装部は仕立て直しや新しく作ったりもします。各部が責任感を持って専門的な仕事をしているから、全体が成り立つんです。うちの座は恵まれていると思いますね」。

佐藤 芳弥さん
昭和30年生まれ。役者を経て小道具部へ。現在は副座長を務める。振者の佐藤利一さんと共に少年歌舞伎の指導も行い、後継者育成と座の継承に力を入れている。

星川 辰也さん
昭和51年生まれ。埼玉県出身。32歳で座に入り、舞台づくりの勉強も兼ねて役者を経験、現在、大道具部長。ポーランド公演では多くの制約の中、現地で見事な舞台を立ち上げた。





上から
山蕗とふきのとうの味噌
干しわらびの松前
山うどと紫蘇穂の味噌

羽黒山参籠所 斎館の SAI 出羽三山

山菜・山の恵みの「菜」
清める・精進潔斎の「斎」、循環・再生の「再」
3つのサイを意味する「SAI」が
令和2年度「つるおか名物コンテスト」
加工食品部門で、金賞受賞!

ワラビにフキノトウにウド、シソの実…。今秋、出羽三山で採れる山菜をふんだんに使った「SAI出羽三山」が誕生した。きっかけはコロナ禍によって来山者が激減したことだった。というのも出羽三山では昔から参拝者や修行者は山のものを食べ、身を清めて山に入った。そのため出羽三山には山の恵みを「採取する人」「提供する人」「食べる人」がいて、山の自然環境はその三者の循環によって何百年も守られてきたという歴史がある。だが今年は来山者の激減で「食べる人」が減り、採取した山菜が行き場を失った。山の循環が危ぶまれる事態となったのだ。

SAI開発プロジェクトはこれを背景に始まった。食開発は出羽三山神社羽黒山参籠所斎館の伊藤新吉料理長が担当。「お山の味をできたての状態で、来山できない人や遠方の人にお届けしたい」と「干しわらびの松前」、「山蕗(やまふき)とふきのとうの味噌」、「山うどと紫蘇(しそ)穂(ほ)の味噌」を考案した。商品化は「Our Dewasanzan」(高城豪代表/令和2年発足)が担当。試食を重ね、容器やネーミング、ロゴなどを決め、3種セットの特製パッケージには庄内一円の農家が松例祭に向けて神社に毎年奉納する稲わらを使った。

こうして完成したSAIは、素朴で野趣に富みつつも洗練されていて、出羽三山のお土産や贈り物にピッタリ。滋味あふれる天然の山菜を、のせるだけ・和えるだけで手軽に味わえるのもうれしい。そして何といってもSAIを体に摂り入れると、自分が出羽三山の循環の一部になったような、そんな気分になる。

購入はオンラインショップ「出羽三山のある暮らし」にて。賞味期限を考慮し、予約分を毎週木曜日に製造、翌金曜日に発送(賞味期限は1〜2週間)。直接購入の場合は、斎館に電話予約の上、斎館か山伏茶屋(山頂)、いでは文化記念館、社務所(随神門隣)のいずれかで受け取り(金曜日限定)。

羽黒山斎館　0235-62-2357
オンラインショップ「出羽三山のある暮らし」

(取材・文　長谷川結)

庄内俳句紀行

冬紅葉の酒井氏庭園を歩く

初冬の冴え渡る空気は
すべてのものを色鮮やかにする。
凛と伸びる背に小春日を受け
致道博物館へ向かった。

季語
冬紅葉（ふゆもみじ）
冬になってから色が際立ってくる庭園などの紅葉。残る紅葉。

酒井氏庭園

鶴岡市の中心部を歩くと、所々で明治初期の洋風建築が目に入る。鶴岡公園の西隣には、蒼穹に白を際立たせた「旧西田川郡役所」が建っていた。かつての鶴ヶ岡城の三の丸、庄内藩主酒井家の御用屋敷であった場所にある致道博物館には、「旧西田川郡役所」のほか、「旧鶴岡警察署庁舎」、多層民家「旧渋谷家住宅」の三つの重要文化財が並ぶ。敷地内に入ると、まだ縄の香りのする張られたばかりの雪吊りが空に映えていた。

雪吊のはじめの梯子定まりぬ

―加藤佑子

江戸の中屋敷を解体、移築したといわれる「御隠殿」は元治元（1864）年造、館内で最も由緒ある建物といえる。中に入ると、壁に何本もの庄内竿が掛けられ、当時庄内藩で釣りが武士の鍛錬として奨励されていたことを紹介している。この釣り竿を担いで海まで歩き、波間に糸を垂れる武士の姿が浮かんだ。御隠殿では毎年3月になると、大名家ならではの優美なお雛飾りや雛道具、職人の技を凝らした市内菓子店のお雛菓子が飾られ、「鶴岡雛物語」が開催される。

ひとの世に小春日和といふベール

―松島あきら

奥の座敷（関雎堂）から望む額縁庭園に心躍らせ、御隠殿の北面に出ると、目の前に国指定名勝の築山林泉庭園が広がった。池泉の水面には、色鮮やかな冬紅葉と青空に浮かぶ白い雲が見事に映し出され、寒禽の声が歓迎の如く響く。池の奥の力強くねじ曲がった見事な松の出島に目を奪われる。2本の松に囲まれた深い入り江に沿って進むと、山茶花が小春の光を花弁に透かし輝いていた。庭園の正確な作庭年代は不明とされているが、往時には築山の向こうに鳥海山を遠望した。

旧西田川郡役所と雪吊り

冬の蝶時の裏側舞ふてをり

―千田忍冬

御隠殿の庇に手を伸ばすように八つ手の花が咲いていた。どこからともなく、ひらひらとたおやかに冬の蝶が現れた。雪が降り積む冬の訪れを前に、時空を超え目の前に広がる景の中に身をゆだねた。博物館前の通りからは想像もつかない世界が広がっていた。

花八手密かなる風雲に従く

―あべ小萩

酒井家第三代当主酒井忠勝公が藩主として庄内に入部してから、令和4（2022）年には400年の節目を迎える。博物館には、さまざまな資料や見どころがあり、何度でも庄内の歴史と文化を紐解きに訪れたい。通りでは朱の色を濃くした赤門がいつでも出迎えてくれる。

写真・文＝あべ小萩（月刊俳誌「月の匣」同人、俳人協会会員）
◆致道博物館 鶴岡市家中新町10-18

御隠殿

松の出島

赤門